



東北大学附属図書館報

木這子

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

ー木這子（きばこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ）ー

目 次

○シリーズ 「情報探索の小径」シリーズ（４） 附属図書館利用講習会を活用した教育研究 高度化の試み……………1	○平成20年度東北大学附属図書館・宮城県図書 館合同企画展「はっぴい さんぼう ー和算の世界へようこそー」から （１）としてみよう！和算の問題……………12
○漱石の貸した本（２）戒能義重差出 夏目金之助宛葉書に関する覚書： 付小宮文庫の成立……………5	○金谷文庫内覧会の開催……………15
○平成20年度大学図書館職員短期研修を受講 して……………9	○金谷治先生のプロフィールと「金谷文庫」 開設の次第……………16
○平成20年度学術情報リテラシー教育担当者 研修を受講して……………10	○古文書見学会の開催……………18
○平成20年度東北大学附属図書館・宮城県図書 館合同企画展「はっぴい さんぼう ー和算の世界へようこそ！ー」を開催……………11	○会 議……………19
	○人事異動……………20
	○編集後記……………20

シリーズ「情報探索の小径（小径）」（４）

附属図書館利用講習会を活用した教育研究高度化の試み

教育学研究科・教育設計評価専攻

教育学研究科においては、平成20年4月、教育設計評価専攻が新設されました。この専攻は、高等学校をフィールドとし、多様化・個性化の進む高校教育の教育課程を設計し、またその教育的効果を測定評価するスキルを体得した人材育成を目的としています。学生は将来高校教員

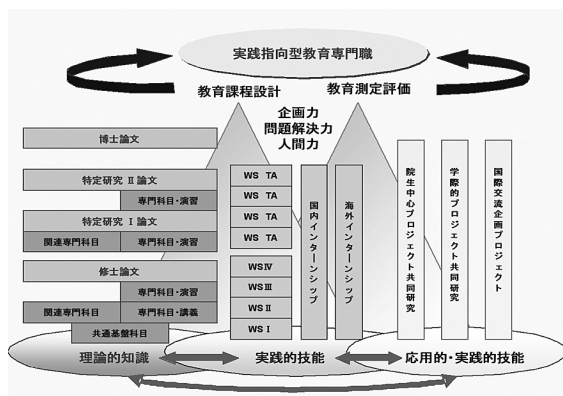
教育学研究科・助教 清水 禎 文

を目指すストレート院生、高校に籍を置く社会人大学院生から構成されています。ストレート院生は、他学部や他大学の出身者の比率が高く、いわば雑居所帯となっていることが、教育設計評価専攻の特徴です。

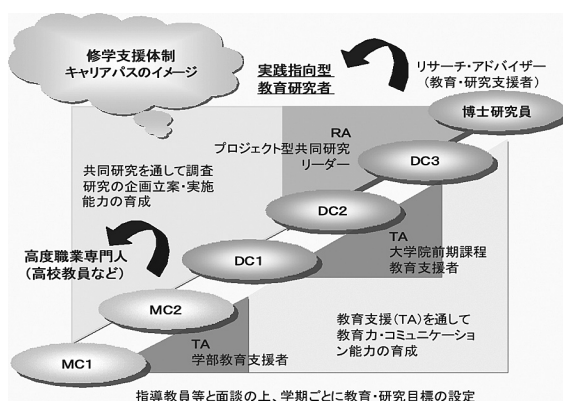
教育設計評価専攻のカリキュラムの中軸は、高等学校における現実的な課題の分析と解決を

目指す実地課題研究（ワークショップ）です。第1 Semesterにおいては基本的な知識とスキルの習得、第2 Semester、第3 Semesterにおいては高等学校との協働による現実的な教育課題のフィールドワーク、そして第4 Semesterでは、第1 Semesterから第3 Semesterまでの積み重ねを踏まえて、各自が個別的な研究に取り組みます。

この実地課題研究を中心として、理論的な知識（講義や演習）、応用的な知識・技能（海外インターンシップや国際セミナー）が配列されています。



（図1）教育設計評価専攻のカリキュラム構想



（図2）教育設計評価専攻の学修支援体制

文献検索の体系的教育の必要性

教育設計評価専攻では、附属図書館のご協力を得て、第1 Semester開設の「実地課題研究（ワークショップ）I」の最初の3時間を使い、「文献検索講習会」を実施しました。その理由

は2つあります。

第1の理由は、教育設計評価専攻の性格上、情報収集の基本的な技法の習得が不可欠だからです。カリキュラムの中軸である実地課題研究は、高等学校におけるフィールドワークです。フィールドワークは地道な文献研究や理論研究という土台を抜きにして成り立つものではありません。現実的な課題（臨床的知識）と既存の研究（蓄積的知識）をつき合わせ、現実的課題の分析・診断を行い、さらに一つひとつのフィールドの実態に即した形で課題解決の提案（処方箋）を行うためには、従来の大学院教育にも増して、さまざまな情報を幅広く収集するための技術と正確な情報分析能力とが求められます。

第2の理由は、近年、インターネットを通じた学術情報利用環境が大きく変わってきたことです。附属図書館のホームページを見れば、学術情報利用環境（とくに文献検索機能）の向上は日進月歩であることが確認できます。つい最近まで理工系ないし医系の独占物と思われたインターネットを通じた文献の閲覧（電子ジャーナル）は、その利用範囲が着実に社会科学系にも広まりつつあります。さらに、インターネットを通じた文献の取り寄せは、海外の大学からも容易に文献を取り寄せることができるなど、数年前とは比較にならないほど便利になりました。しかし、こうした新たな学術情報利用環境を積極的に活用し、研究の高度化を図るためのトレーニングは、決して十分とは言えません。少なくともこれまで私が携わってきた大学教育においては、学術情報利用に関するトレーニングのために十分な時間を割り、適切な情報を提供し、実際に活用する技法まで教えることはできませんでした。

こうした理由から、新設の教育設計評価専攻において、附属図書館利用講習会（文献検索講習会）を行うことにいたしました。

講習会の事前準備

文献検索講習会を実施するに先立ち、附属図書館の図書館情報教育支援WGの担当者と再三の打合せを行いました。担当者は、ライブラリアンとしての経験を通して、研究高度化のためには文献検索の基本的な技法の教育が不可欠であり、また今後の研究推進のためには研究者(大学院生を含む)とライブラリアンとの協働が欠かせないとの持論をお持ちです。

担当者との話し合いの中で、教育設計評価専攻の基本的なコンセプトとカリキュラムの説明をさせていただき、専攻と授業の趣旨に沿う形で授業と教材の準備をしていただきました。この原稿を書くにあたり、担当者に準備していただいた資料を机の上に並べて見ると、わずか3時間のレクチャーのために、専攻独自のテキストを初めとして膨大な資料を毎回準備していただいたことに改めて驚くばかりです。

文献検索講習の内容

文献検索講習は附属図書館2号館のコンピ

ュータ室で行われました。その内容は、文献検索入門・蔵書検索(第1回)、雑誌論文(日本語・外国語)検索(第2回)、外国語論文・新聞記事検索・その他(特殊資料検索)(第3回)でした。

講習は、講義、演習、アンケートから構成されました。それぞれの検索システムの説明、具体的な使用方法等の講義の後、演習問題を通して実際に文献検索を行いました。そして毎回、授業の最後に簡単なアンケートを行い、その結果は即座にフィードバックされ、次回に活用されました。

もう少し講習内容に立ち入って、ご説明いたしましょう。上述いたしましたように、教育設計評価専攻の学生は、高校教員を目指す大学院生、スキルアップを目指す現職の高校教員から構成されています。とくに他大学出身者、社会人は、これまで附属図書館の利用経験が乏しいため、講習は文献検索の初歩から初めてもらうことにしました。メンバー作成の授業案は下記のとおりです。

教育学研究科教育設計評価専攻 図書館講習会講義内容(1日目)

日 時	プログラム	所要時間
16:20-16:40	・図書館案内と資料概論	20分
16:40-17:00	・Google 検索術について	30分
17:00-17:30	・蔵書検索システムについて	30分
17:30-17:50	・演習 アンケート	20分

教育学研究科教育設計評価専攻 図書館講習会講義内容(2日目)

日 時	プログラム	所要時間
16:20-16:40	・先週の補足: MyLibrary, 学外資料取寄	20分
16:40-17:00	・日本語論文の検索について	30分
17:00-17:20	・演習	20分
17:20-17:50	・外国語論文の検索について	30分

教育学研究科教育設計評価専攻 図書館講習会講義内容（3日目）

日 時	プログラム	所要時間
16：20-16：40	・貴重書展示室見学	20分
16：40-17：20	・外国語論文の検索について	40分
17：20-17：40	・新聞記事の検索について	20分
17：40-17：50	・アンケート	10分

日本語論文に関しては、CiNii、雑誌記事索引、MAGAZINPLUS、JDream II、大宅壮一文庫雑誌記事索引など、また外国語論文の検索に関しては、教育学研究に不可欠なERIC（Education Resources Information Center）を初めとして、PIO（Periodicals Index Online）など比較的新しい検索システムまで解説していただきました。

学生の感想から

文献検索講習会の終了後、学生の率直な感想を聞いてみました。おおむね肯定的な意見が多かったように思います。たとえば、「これまで、これほど詳しい講習は受けたことがなかった」（本学部出身者）、「レクチャーの後に練習問題が用意されており、じっさいに検索を行うことにより、よく理解できたと思う」（他大学出身者）、「インターネットを通じた文献検索は初めての経験でしたが、初歩的な段階から教えていただきました。とても参考になりました」（社会人）などの回答を得ました。

おそらく、文献検索を初めとする附属図書館利用の技は、知識として語られても身につくものではありません。どれほどすばらしい利用ガイドを読んだとしても、じっさいに活用してみなければ、その技は体得できるものではありません。今回の文献検索講習会では、練習問題を実際に解く作業が組み込まれておりました。これが好評の大きな原因でしょう。

その反面、学生のスキルに差があるため、時間を持てあます学生がいたことも事実です。この点については、たとえば、習熟度別の個別プログラムや上級コースを組み込むなど、プログラムに反映させていく必要があります。

文献検索講習会は、いわば「畳の上の水練」に過ぎません。この講習会の真価は、じっさいに実地課題研究を行う過程において、あるいは修士論文を作成する過程において、一人ひとりの学生たちが確認することになるでしょう。

最後になりますが、私どもの文献検索講習会にご支援をしていただきました附属図書館の図書館情報教育支援WG、特に実際に担当された吉植さんに御礼申し上げます。

（しみず・よしふみ）

漱石の貸した本（２）

戒能義重差出夏目金之助宛葉書に関する覚書：付小宮文庫の成立

情報サービス課参考調査係 渡 邊 愛 子

前号の「漱石の貸した本（１）」では漱石に葉書を送った戒能義重の人物調査を記した。

この稿では、なぜ漱石宛葉書が小宮文庫に残されたのかについて考察する。漱石宛書簡が挿入されているということは、当然漱石の旧蔵書であるとまず想定される。ここで大きな問題点は２点ある。①漱石の旧蔵書が小宮文庫に残されているのか。残っていないとしたら元来どの旧蔵書に葉書が入っていたのか。②葉書の消印の日付大正３年４月２７日が意味するのは、単に小宮がその本を借りた日なのか、漱石が読んでいた日付なのか。以下順に検討を行った。

小宮豊隆が借りた本

葉書が挿入されていたドストエフスキー全集の第１巻『罪と罰』¹⁾を書庫で確認した。しかし Komiya と署名されているこの１３巻セットが漱石山房から持ち出されたものとは考えがたかった。

折から「國文學：解釈と教材の研究」で夏目漱石の特集が組まれた。そしてその中に漱石の「貸した本」²⁾の翻刻が掲載されたのである³⁾。「貸した本」は漱石山房蔵書の貸出簿であり、明治４０年から大正４年３月頃までの記録と推定される。

「貸した本」翻刻によると、小宮豊隆の名前のある貸出は全部で８点。昭和２年の貸出を除いて消印の大正３年以降の貸出は以下３点である。

127 Sudermann:Regina

131 メレシコフスキ 11月19日

「レオナルド、ダ、ヴィンチ」

133 クロポトキン露西亜文学

（数字は「貸した本」翻刻による。以下「貸した本」に関する数字も同様）

この３点で、漱石文庫の検索を行ってみると、果たして３点とも、所蔵が確認された。

127 Regina [漱/783]

131 The forerunner:the romance of Leonardo da Vinci [漱/752]

133 Ideals and realities in Russian literature [漱/731]

図書館が公開している「貸した本」の画像も確認すると、小宮の貸出分は漱石によって、返却されたことを示す棒線が引かれている。小宮文庫に漱石の蔵書が返却されずに残った、という推定はなくなった。

大正５年３月１８日森田草平宛の書簡には「小生書籍にて御手元にあるもの一応御返し願ひ候方々へ貸したるを整理の必要上一度取りもどす訳に候」⁴⁾とある。もし、この時期まで小宮が借りていたのであれば同様の依頼を受け図書は返却されたのであろう。

では３冊の内どの本に葉書が入っていたのであろうか。漱石から借りた本と、自身の蔵書を相互参照する内に、葉書だけが残ってしまったと考える。葉書が小宮の蔵書に紛れ込んでから、何度かその蔵書は引越をされている。少なくとも、小宮が東北帝国大学に赴任する時、その職を辞して東京に帰る時、そして小宮文庫として納本される時が考えられる。幾度かの移動を経ても紛失することなく今日まで伝わったのは、葉書が挿入されてから、その本があまり開閉されることがなかったからだろう。そうすると、『罪と罰』と最も関係の深い、133 “Ideals and realities in Russian literature”（以下“Russian literature”）によって葉書が移動したのではないか。

“Russian literature”は現在、小宮文庫にも蔵されている。漱石文庫本は1905年ロンドン版であるのに対して、小宮文庫本は1919年ニューヨーク版⁵⁾である。この本は大正５年の春に漱石に返却されたものの、やはり後年小宮に必要が生じ、購入されたものであろうか。

大正3年4月27日が意味するところ

戒能義重差出の葉書が“Russian literature”によって、小宮蔵書に紛れ込んだとして、消印の大正3年4月27日という日付は単に小宮がこの本を借りた日付を指すのだろうか。「貸した本」翻刻に戻ってみる。124～126は大正3年1月21日鈴木三重吉の貸出である。次に来る127が小宮の貸出である。日付から考えると、この127が最も近いと思われる。仮に、4月27日の葉書到着日を小宮が本を借りた日としよう。すると、小宮は訪れた漱石山房で、蔵書を借りるついでに、漱石の机上か何かにあった葉書を持ち帰ってしまったことになる。蔵書の貸出記録をしっかりと付けていた漱石がそんなことを許すであろうか。やはり、葉書が到着した時に漱石が読んでいた本に葉書が残り、それをそのまま後日小宮が借り出した、という方が自然ではなかろうか。131の貸出が（大正3年）11月29日であるから、133“Russian literature”を小宮が借り出したのは大正3年中か、翌年の早い時期であろう。

漱石とロシア文学

次に、大正3年に“Russian literature”を漱石が読んでいる必然性を考えなくてはならない。この本には漱石の蔵書の特徴である書き込みや傍線が見られない。

森田草平は、漱石が英文学から大陸文学を読み出したのは朝日新聞入社後で、ドストエフスキーを漱石に勧めたのは自分だという。⁶⁾ 明治42年頃の日記に「森田草平来議論」⁷⁾とある議論はドストエフスキーに関することだという。漱石晩年の作品に、ドストエフスキーの影響があることは小宮⁸⁾、森田以下多くの研究者が指摘している。

「蔵書目録」⁹⁾は漱石のイギリス留学中、明治34年11月から、主に購入した洋書について、著者・タイトル・価格を記したものである。漱石によって180番から1170番まで通し番号が付されているが、途中飛び番、重複があり781点が掲載されている。¹⁰⁾ これには“Russian literature”は1063番として4円15銭で購入したことが書いてある。「蔵書目録」1012番中村達太

郎『日本建築辞彙』は明治40年の出版、1141番Baring“Landmarks in Russian Lit.”は明治43年10月6日に読み始めたと日記にある。¹¹⁾ すると“Russian literature”は明治41年～42年頃の購入であろう。購入時に読んだだけならば、大正3年より随分以前のことになる。

「英語青年」に掲載された石田憲次「夏目先生の談片」¹²⁾は大正4年秋に漱石にインタビューした記録である。そこに以下の漱石の談話が記されている。

「僕は横着なのか何か、書物を二度読むことのない男で、（中略）近頃僕の所へ来る若い人たちはMerejkowskyのTolstoyとDostoievskyに大変感服して批評の典型のように云っているが、僕はうまく書いてあると思うが感心はせんね。」

話題に乗せられているMerejkowskyの「TolstoyとDostoievsky」は「蔵書目録」1109番に登場するもので、「貸した本」では110として安倍能成（大正元年10月21日）が借り出している。¹³⁾ そして安倍と森田によって訳され『人及び芸術家としてのトルストイ並にドストエフスキー』として大正3年に出版されたものだ。¹⁴⁾ 大久保純一郎¹⁵⁾は、この漱石の談話に登場する若い人たちは安倍と森田であって、大正2～3年頃木曜会の話題に乗せられたと推定している。大久保はさらにこのインタビューは二度読むことのない漱石が『トルストイとドストエフスキー』を2度目に読んだ証左であることを、漱石の書き込みの解釈から云っている。「TolstoyとDostoievsky」を再読したのであったら、類書の“Russian literature”もこの時期に比較のため読まれたのではないか、と考える。小宮がこれを借り出したのも、木曜会での議論が動機と考えるがいかなものであろうか。

まとめ

小宮文庫のドストエフスキー全集『罪と罰』に残された「戒能義重差出夏目金之助宛葉書」が意味するところは何か、ということを察した。

葉書が出された大正3年頃、木曜会の話題に上っていたメレジュコフスキー『トルストイとドストエフスキー』に関連して漱石が再読した

クロボトキン“Russian literature”に葉書が挟まれ、それが小宮に貸出され、小宮が相互参照して読んだ『罪と罰』に葉書だけが残ったのではないかと推定した。

推定を確定にするには、漱石の書き込みの調査、あるいは漱石のロシア文学受容と作品への影響を詳細に検討しなくてはならない。また小宮が“Russian literature”を参照したのも本当に『罪と罰』であったのか。大正3年に購入している同じ『ドストエフスキー全集』の4-7巻のどれかでなかったのかを、書き込みから検討することも必要かと思う。しかしそれは、到底私の力の及ぶところでなく、ここで戒能義重葉書に関する稿を閉じる。

小宮文庫の成立

前号の記事を読んだ館内職員から、私の小宮文庫成立についての認識が誤っていたことをご指摘いただいた。誤りを訂正するとともに、小宮豊隆旧蔵書が現在の小宮文庫となるまでの経緯を、ここに記しておく。

前回の注1で昭和43年度寄贈とした点は、購入の誤りであった。「物品管理通知書」によると昭和43年10月2日に小宮豊隆旧蔵書1310冊は丸善から購入された。当時の図書館報「図書館通信」No58「第11代金谷館長の時代」¹⁶⁾という記事中に「S41.5小宮文庫購入の折衝を開始」の一文がみられる。小宮豊隆が亡くなったのは昭和41年5月3日だから、かなり早い段階から購入に向けた検討が開始されたことになる。しかし、昭和41年に受入された晩翠文庫のように文庫として別置されることなく、小宮旧蔵書はこの時点では一般資料と混配された。ただ、目録カードに和洋別に「小宮」「komiya」と記された。なぜ別置されなかったのか。当時在籍した職員は同時期にいくつか個人の旧蔵書を購入し、小宮だけ別扱いする余裕が図書館側になかったのではないかと話している。

小宮旧蔵書には多数の書き込みや武者小路実篤らの献呈本が含まれている。受入当時からその重要性は認識されていたようで、洋図書については、以下のようなコメントを付して請求記号だけを羅列したカードが作成された。

小宮文庫に属する図書及びその目録カードは以下の記号を与えられて一般洋書に混配されている。(中略)以下の記号が小宮文庫を引き出すための唯一の手掛かりである。小宮氏の書き入れ本が多いため、後日の利用を考えてここに記号のみをメモした S46.4.19

和図書については小宮旧蔵書分のコピーカードが作成された。このカードは鉛筆書である。最初洋図書と同様に請求記号のみのカードが作られ、それをもとに後年誰かが作成したものかもしれない。文学部助手で長年図書館に勤務していた高木忠氏は折々小宮文庫の重要性を語っていた。その言を受けた職員により小宮文庫カードには'97.10.29付けで昭和46年と同趣のコメントが残されている。和書分類カードの小宮旧蔵書分には同じ'97.10.29付高木氏の署名で献辞に関するコメントが鉛筆書きで付されている。

さらに時は移って平成13年。漱石文庫閲覧を主目的に来館された学外研究者より小宮旧蔵書閲覧の申請があった。担当した職員は文庫として別置されているわけでもなく、独立した目録が作成されているわけでもない状況を説明した。その研究者は漱石研究との関係から小宮旧蔵書の重要性を切々と語って帰られた。夏目漱石の弟子としての小宮豊隆、漱石文庫を東北大学にもたらした第5代図書館長としての小宮豊隆、従前からの高木氏の指摘、そして直接的にはこの外部研究者の指摘を契機として小宮旧蔵書を文庫として別置することが決せられた。個人文庫として命名、別置するためには本来、「寄贈図書（一括寄贈）選定等取扱要項」により図書館本館収書委員会の決議が必要なのであるが、小宮文庫の場合は当時の情報サービス課長と閲覧第一係長の専決によって行われた。そのためか、附属図書館ホームページの文庫解説に「小宮文庫」は登場しない。次段に述べる別置作業中に編纂された『東北大学百年史』にその他個人文庫に「...小宮文庫...がある」¹⁷⁾と紹介されているのみである。

別置をするにあたり、まず前述の目録カードを頼りに一般書架から該当書を抜き出した。そ

れから一冊ずつ書込・傍線、挿入物、献辞等が点検された。そして平成13年10月、ワープロで「小宮文庫目録」がわずかに3部作成された。古典資料329点、旧片平和書446点、旧片平洋書508点¹⁸⁾とそれらの書込・傍線、挿入物の情報が記載された。古典資料以外が小宮文庫として別置された。

「夏目金之助宛戒能義重差出葉書」が再発見されたのはこの別置作業時であった。先年遡及事業での発見が再々発見ということになる。前号に記載した「令嬢が葉書を見せていた」云々の部分は、この「小宮文庫目録」の成果をもとに平成19年2月に来館された令嬢に、葉書を紹介した、というのが正しい。

現在の要項では「個人文庫は寄贈のもの」となっており、その先入観から、小宮文庫について誤った記載してしまった。今回訂正記事を書くために、先輩方に話を伺い、小宮文庫として存在を知られていなかったからこそ、「戒能義重葉書」、押し花などがそのままに残されてきたのか、との感も持った。現在小宮文庫は遡及入力が終了し、その存在が全世界から確認できるようになった。漱石研究、あるいは小宮研究上の重要な資料としての利用と共に、旧蔵の状態を保存することの重要性を改めて思った。

小宮文庫整理について多くの館員に質問をした。年末の慌ただしい中、快くご対応頂いたみなさまに感謝いたします。

(わたなべ・あいこ)

注および参考文献

- 1) F. M. Dostojewski “Rodion Raskolnikoff : Schuld und Suhne : Roman”(Samtliche Werke / F.M. Dostojewski ; unter Mitarbeiterschaft von Dmitri Mereschkowski ; herausgegeben von Moeller van der Bruck ; Abt. 1., Bd. 1-2) Piper, 1908[本館書庫小宮 IVB11/D6]
1巻は“Komiya” 2巻1911 S.Musha 3巻以降各巻に小宮の号「蓬里雨(ほうりう)」の黒印。4巻T. Komiya 18 Okt'13, 6巻・7巻にT. Komiya 4 Okt'13との署名があり、この頃購入されたことが考えられる。2巻は武者小路実篤から贈与か。いずれも多くの書込がある。
- 2) [漱/27-18] 画像漱石文庫データベース <http://www2.library.tohoku.ac.jp/soseki/images/img27-18.pdf>(URL 確認: 2008.12.26)
- 3) 仁平道明; 河合隆司/漱石の「貸した本」(翻刻と解説)「國文學: 解釈と教材の研究」53(9)(通号769)(臨増), p161-167, 2008 [本館学関]
- 4) 『漱石全集』岩波書店 1997第24巻 p522 [本館書庫 KH 426/010] 以下『漱石全集』は1997年版
- 5) [本館書庫小宮 IVB11/K5]
- 6) 森田草平 第6章南早稲田町地代『続夏目漱石』甲鳥書林 1943 p474-487
- 7) 例えば明治42年7月11日『漱石全集』第20巻 p58
- 8) 小宮豊隆 序『夏目漱石』岩波書店 1938 [本館書庫 KG 578/0354]
- 9) [漱/26-16] 画像漱石文庫データベース <http://www2.library.tohoku.ac.jp/soseki/images/img26-16.pdf>(URL 確認: 2008.12.26)
- 10) 飛ヶ谷美穂子 漱石自筆図書購入ノート 翻刻資料編第二部 p25-45『漱石の源泉: 創造への階梯』慶應義塾大学出版会 2002.10 [本館書庫 KG578/0194]
- 11) 『漱石全集』第20巻 p224
- 12) 石田憲次 漱石先生の談片「英語青年」36(9) p280, 284 1917 [本館2号館]
- 13) Dmitri Merejkowski “Tolstoi as man and artist, with an essay on Dostoevski” 1902 [漱/754]
- 14) メレジュコーフスキー著 森田草平, 安倍能成訳『人及び芸術家としてのトルストイ並にドストエフスキー』玄黄社 1914 [未見] 昇曙夢がロシア語原著訳した『トルストイとドストエフスキー: その生涯と藝術』東京堂 1935 [本館書庫旧片平 IIIB/ト1] によれば, 安倍・森田訳はドイツ語版からの重訳。
- 15) 大久保純一郎 漱石とドストエフスキーの小説(4) —『トルストイとドストエフスキー』再読—「心」30(2) p80-89 1977 [本館2号館] 大久保純一郎 漱石とドストエフスキーは「心」に5回連載された。29(1), 29(8), 30(1), 30(2), 30(6) いずれも今回の論に大変参考になった。
- 16) 「図書館通信」no58 1969 p232
- 17) 『東北大学百年史』4 部局史1 p173 2003
- 18) 冊数は1303冊。受入冊数より7冊少ない。目録作成者は、「古典資料の中に、見つけられないものがあったように思う」と話している。

初稿を見てくださった大森一彦氏が、かつて聞いたこととして元附属図書館調査研究室長原田隆吉先生の言をご教示くださった。「洋書の多くが小宮家に残され、受け入れたものは小宮氏の思想を十分反映したものではない(から別置しなかった。)」小宮文庫受入の顛末を調査された史料館曾根原助教は、発表資料をお示しくくださった。それは全く原田先生の言を裏付けるものであったのでここに付記する。(曾根原理 小宮豊隆と個人文庫「書物・出版と社会変容」6 2009.3) 大森氏、曾根原先生のご助言に感謝申し上げる。

平成20年度 大学図書館職員短期研修を受講して

工学分館 整理運用係 尾 田 陽 子

平成20年11月10日（月）～13日（木）の4日間、東京大学において「大学図書館職員短期研修」を受講する機会を得ました。この研修は、全国の大学図書館等の若手職員が、今後の図書館運営を担う要員となる上で必要な図書館業務の最新の知識を習得するために開催されています。

講義科目は実に多彩で、目録の最新事情や著作権について学ぶ日があるかと思えば、別の日はNII学術コンテンツ事業や戦略的な資料保存について、あるいは自力でスキルアップするための工夫に関する講義などがありました。

さて、講義内容から特に印象に残ったことを1つご紹介します。

それは「組織全体で理念や目標を共有し、各人はそれに沿って業務を行うこと」の重要性です。大学にはそれぞれの大学が掲げる目標があります。図書館にしても、その目標を達成するための一機関として存在するわけですから、そこに属する図書館員についても、全員がこの大前提を指針として業務に取り組むことで、何が本当に必要な業務であるのかを明確に見極めて効率的に業務を行うことが出来ると言えるでしょう。お金と人が今後ますます削られていく中で、このような考えは非常に重要であると感じました。

講義形式の研修以外には、10人程度の班に分かれて数日間話し合った結果を最終日に発表するというグループ討議の時間もありました。私の班は「利用者にフィットする図書館とは？」というテーマに取り組みました。電子ジャーナルやオンラインサービスなど、来館せずともサービス提供が可能になりつつある昨今、「場」としての図書館はどうあるべきかという問題を中心に、各館の状況・事例を紹介しつつ熱い議論を交わしました。

研修の内容とは少し話が離れますが、通常の生活や業務からしばし離れて大学図書館をめぐる諸問題をより大きな観点で眺めていると、おのずと普段の自分の働きぶりや考え方の偏っているところが客観的に見えてきて、反省することがたびたびありました。目先の雑事や締め切りで頭がいっぱいで、普段は自分を見つめ直す機会はあまりありませんので、これは非常に貴重な体験でした。これもひとえに快く私を研修へと送り出してくださった職場の皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

（おだ・ようこ）

平成20年度学術情報リテラシー教育担当者研修を受講して

情報サービス課参考調査係 渡 邊 愛 子

平成20年11月19日～21日の3日間、国立情報学研究所が主催する「学術情報リテラシー教育担当者研修」を受講しました。この講習会が開講された平成16年度には当館の「全学授業「大学生のための情報検索術」の実施と『東北大学生のための基礎知識』の刊行が先進的な事例として発表されています。また筆者自身も平成19年度「大学図書館職員短期研修」で学術情報リテラシー入門の講師を担当しました。それにも関わらず今回研修を希望したのは「授業の受講生には本当にこちらの意図が伝わっているのか」「『基礎知識』は読んでもらいたい人たちに読まれているのか」「図書館主催の講習会はどうしたら必要という意識を持ってもらえるのか」という渦巻く課題を整理する場にしたいと考えたからです。

研修は青山学院大学野末俊比古先生の昨今の図書館で行われるリテラシー教育全体を俯瞰する講義の後、各講師からそれぞれの取り組みについて事例発表がありました。日程の半分は班ごとのグループ討議に費やされました。東北大学附属図書館参考調査係という立場からみて、どの講義・発表・討議も、示唆に富み、業務改善のポイントが次々と浮かぶものでした。

全体を通して強く感じたことは、業務評価あるいは改善のためのPDCAサイクルの重要性でした。業務評価の場面で最近よく聞かれる

「Plan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Action（改善）」（以下PDCA）ですが、発表されたどの事例もこのPDCAが本当にうまく機能していると感じられました。「なぜ上手くいかなかったのか」「現状はどうなのか」を良く分析し、次に繋げるという至極当たり前のことが、現在の私は残念ながら実施できていないことに思い当たりました。

もうひとつのポイントは「主語を利用者にする」ということでした。「単に「～～～の講習会を実施します」ではなく「この講習会を受講した利用者は〇〇〇〇になる」というフレーズをまず考える。そうすることで図書館視点ではなく、利用者の立場に立った講習会が行えるはずなので、是非一度考えてみてください」との野末先生のコメントが印象的でした。PDCAも、利用者側に立って分析することで、大きな効果をあげていました。

すでに来年度の講習会計画を企画する時期になっています。今講習会で学んだことを活かし、少しでも利用者が図書館を有効に活用できる図書館講習会を実施していきたいと考えています。

研修の講師資料、成果物は以下のページで確認できます。

<http://www.nii.ac.jp/hrd/ja/literacy/result.html>

（わたなべ・あいこ）

平成20年度東北大学附属図書館・宮城県図書館合同企画展

「はっぴい さんぼう ー和算の世界へようこそ！ー」を開催

附属図書館本館では、2008年10月25日（土）から11月24日（月）までの約1ヶ月間、合同企画展「はっぴい さんぼう ー和算の世界へようこそ！ー」を宮城県図書館で開催しました。

今回の展示会は、関孝和の没後300年を記念し、関孝和ゆかりの資料を所蔵している宮城県図書館と、全国和算資料の3分の2を所蔵しているといわれている東北大学附属図書館から、新収の平山文庫を含め精選した資料をもとに、和算に親しめる内容としました。特に和算に興味を持たれている方々からは好評を得ることが出来、一般の方にも親しめる展示となったと思います。東北大学の同窓生の方からは、「このような資料が図書館にあったとは！」と驚きの声とともに、感激されたアンケートに書いておられました。小さい子どもさんを連れのお父さんお母さんが、「問題を解いてみよう！」の体験コーナーで、一緒にパズルに取り組んでいる姿も見受けられ、来館された市民の方々から好評をいただき、2,566名の来場者がありました。

展示会では、第1部「といてみよう！和算の問題」として、いろいろな和算書の中から、鶴亀算やままこだての資料を展示、第2部「のぞいてみよう！塵劫記の世界」では、江戸時代に広く親しまれた数学（和算）の世界や、和算流行のきっかけでもあり江戸期を通して庶民に親しまれた『塵劫記』を紹介、第3部「ふれてみよう！和算家の人生」では、「算聖」とも称される関孝和など、和算のはじまりから様々な流派を生んだ和算の展開について、人物とその業績を中心に紹介しました。また、戸板保佑など仙台・東北地方に関連する和算・和算家についても取り上げて展示しました。

展示会初日の10月25日（土）13：30から15：30まで、展示会記念講演会を開催しました。

講師に、第3部で展示した「算法少女」の著者である遠藤寛子氏を迎え、「算法少女のなぞ」と題して、小説「算法少女」と和算書「算法少女」との関係や、小説が生み出されるまでを、ご自分の体験を通して楽しく講演されました。

「自分の算法少女を作ってください。」とのお話を、一般市民や中学校・高校の先生など86名

が熱心に聞き入っていました。

また、11月8日（土）13：30から16：15まで、東北大学名誉教授の土倉保氏と宮城教育大学教授の萬伸介氏を講師に迎え、それぞれ「和算を楽しんだ江戸時代の人々」、「いろいろな見方で楽しもう！和算の問題」と題して、講演されました。

土倉先生の講演では、江戸文化の中心的な意向である「美の模索とそれを作り上げていく楽しさ」、和算で扱う美しい図形、正確な計算、その表現との関係について話されました。魔方陣の解き方の法則を見つけようと必死に取り組んでいる人もありました。

萬先生の講演では、和算を題材にして、いろいろな見方、考え方などを紹介され、一緒に図形に色を塗り、作業をとおして図形を考えていく楽しい一面を話されました。和算を勉強している方や一般市民、学生など104名がメモを取りながら熱心に聴いていました。



（遠藤寛子氏に展示説明）



（11／8の講演会）

今回の展示会にあたり、ご指導・ご協力いただきました各機関、諸先生方に、この場をかりて御礼申し上げます。

（展示ワーキンググループ）

平成20年度東北大学附属図書館・宮城県図書館合同企画展

「はっぴい さんぼうー和算の世界へようこそー」から

(1) といてみよう！和算の問題

情報管理課受入係 藤 澤 こず江

はじめに

東北大学附属図書館・宮城県図書館の合同企画展は、関孝和没後300年を記念して「はっぴいさんぼうー和算の世界へようこそー」というテーマで開催され、「といてみよう！和算の問題」、「のぞいてみよう！塵劫記の世界」、「ふれてみよう！和算家の人生」の3部構成で展示が行われました。本誌面でも3回の連載で各部を紹介します。

和算が日本生まれの数学であることはご存知の通りですが、現代の大学生でも解けないような高度な問題がある一方で、テレビのクイズ番組で取り上げられるパズルのようなおもしろい問題もたくさんありました。また、それらの書物には江戸時代の人々が親しんだ楽しい挿絵も掲載されています。第1部は展示の導入となることから、まずは和算がどんなものかを興味を持ってもらうことを目的に、和算の問題や和算に関する興味深いエピソードを取り上げました。

1. 和算の問題

和算が何かを端的に知ってもらうには代表的な問題を実際にやってみてもらおう！ということで、展示ではいくつかの代表的な問題をあげました。

① 鶴亀算

まずは和算の代表的な問題としてよくあげられる「鶴亀算」。鶴と亀の頭数の合計と足の数の合計をもとに、それぞれの頭数を求める問題です。しかし、この問題が鶴と亀になったのは後のことで、中国からは「雉兔算」「鶏兔算」

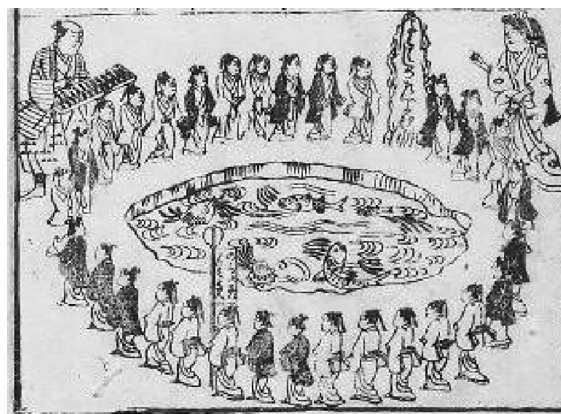
などとして伝わりました。今回展示した「算法闕疑抄」(1683刊)でも雉と兔の絵が描かれています。



「算法闕疑抄」雉兔算の挿絵

② ままこだて

次にあげたのは「ままこだて」です。もともとは円形に並べた石を順に数えて取り除いていき、最後にのこるのはどの石かあてるような問題です。この形式の問題に「ままこだて」という名称が定着しているのは、江戸時代の和算書のベストセラー、「塵劫記」に出てくる問題が有名だからでしょう。



「新編塵劫記」ままこだての挿絵

ある男が自分の後継者を決めるために先妻の子（ままこ）15人と後妻の子15人を庭の池の周りに並べ、数えて10番目毎に子どもを輪から外していき、最後に残った子どもを後継者にしようとするのですが、後妻は自分の子どもが残るように画策しています。はたしてどうなるのでしょうか？

③裁ち合わせ

布や紙を切り合わせていろいろな形をつくる問題です。



「和国智恵較」

こちらの図は「和国智恵較」で長方形の紙をうまく切って正方形にしてみよう、という問題に取り組んでいるところが描かれています。江戸時代の人々が和算の問題を楽しんでいるのがよくわかります。

④重さや体積をはかる方法

江戸時代には重さをはかるために天秤を、体積をはかるために枡などの道具を使っていましたが、象や人など、大きなものをはかるためにはどうしていたのでしょうか。

図は人の体積をはかる方法です。満杯にした風呂桶に入って水をあふれさせ、再び風呂桶が満杯になるまで枡で水をはかりながら追加すると、自分が枡何杯分の体積かわかるというわけ

です。

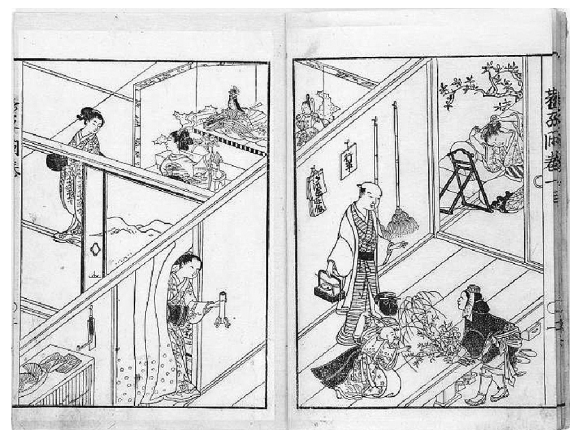
和算では問題の答も大事ですが、このように問題の解き方が重要でした。



「早割算法早合点」人を升目に積る法

⑤花売り問題

現代の「組み合わせ」の問題です。ある花売りの女性はある桃・柳・桜・椿から毎日3種類を選んで売りに来るのですが、3月3日桃・柳・椿を売っていた場合、次に同じ組み合わせの花を売りに来るのはいつになるのでしょうか。「算法童子問」に描かれた挿絵は花を売り買いする人々の絵がいきいきと描かれています。



「算法童子問」花を売る事

2. 仙台藩士がつくった和算問題

仙台藩は和算を正式な学問として藩校「養賢堂」で教えていました。仙台藩士の手になる和算書も残されており、初学者向けの問題も多く

作られました。

第3部で取り上げる戸板保佑（1708～1784）は仙台藩を代表する和算家ですが、その著書である「関流算術綱領伝」には仙台人と京都人で車座になって酒を飲んでいき最後にはみんなで酔いつぶれてしまう、ままこだて問題が掲載されています。

また、その戸板に学んだ船山輔之（1738～1804）は、絵に問題をつける形で「絵本工夫之錦」著し、算術へ興味をもってもらおうとしました。

3. 和算のまじない

第1部の最後には、不思議な力を持っていた？算術のエピソードを加えました。

「階梯算法」は算術の手引きというような意味の書名ですが、その中にこんなまじないがあります。

- ・しゃっくりが止まらなくなるときは、算盤に18とおいて舌で舐め、しばらく上を向いて息をしないでいるとたちどころに止まるのは不思議なものである。ひみつにすること。

他にもいくつか同じようなまじないが載っていますが、算術や数には不思議な力があると考えられていたようです。和算家がすらすら問題をとく様子は魔法のように思えたのかもしれませんが。

おわりに

展示コーナーで紹介できる問題には限りがあるので、展示室には「和算の問題に挑戦！」と題したプリントをおいておきました。持ち帰って楽しめるので、好評だったようです。また、県図書館の担当の方が作成し、実際に長方形のピースをT字や正方形に並べ替える「裁ち合わせ」パズルに挑戦できるコーナーには子どもから大人まで多くの方が挑戦されていました。

詳しい問題と解法を知りたい方にはものたりない内容だったと思いますが、和算が何かをまったく知らない方に興味を持っていただけたのではないかと思います。

（ふじさわ・こずえ）

参考文献

- ・『江戸時代の庶民の娯楽 和算で遊ぼう』佐藤健一著 かんき出版、2005
- ・『江戸を割る』西田知己著 研成社、2008
- ・『子どもたちは象をどう量ったのか？：寺子屋の楽しい勉強法』西田知己著 柏書房、2008
- ・『再発見江戸の数学』桐山光弘・歳森宏著 日刊工業新聞社、2006
- ・『趣味の和算』加藤平左エ門著 槇書店、1974
- ・『中学数学で解ける和算百話』佐藤健一著 東洋書店、2007
- ・『日本の数学』小倉金之助著 岩波書店、1940
- ・『和算を楽しむ』（ちくまプリマー新書）佐藤健一著 筑摩書房、2006

金谷文庫内覧会の開催

附属図書館では、このたび整理が終了した金谷文庫の内覧会を平成20年10月31日（金）に開催しました。

金谷文庫は、中国古代思想史研究の権威であった本学名誉教授・日本学士院会員金谷治博士の旧蔵書で2008年にご遺族から寄贈を受けたものです。

内覧会には故金谷教授のご遺族を始めとする関係者が出席し、初めに野家館長から文庫を寄贈された故金谷教授のご令室金谷晴美様に感謝

状が贈呈されました。その後、附属図書館本館地下2階に収められた金谷文庫の見学が行われました。

金谷文庫は漢籍2,636冊及び中国思想分野の単行書（中国書・和書・洋書）2,616冊から構成される5,252冊のコレクションで、中国哲学研究の発展に寄与することが期待されます。

なお、金谷文庫は平成20年11月から一般公開されています。

（総務課）



金谷治先生のプロフィールと「金谷文庫」開設の次第

金谷（旧姓多気田）先生は三重県に生まれる。関西大学東洋学の開祖石浜純太郎先生の勧めで、東北帝国大学法文学部支那哲学科に入学（1942）。考証学の泰斗武内義雄教授に師事して、本格的に支那古典の本文批判（テキスト・クリティーク）に基づく文献学を学び卒業（1944）。兵役に服務、死線を越えて復員。東北帝国大学法文学部副手嘱託（1945）、旧制弘前高等学校講師嘱託（1946）を経て、東北大学法文学部講師（1948）在任中に、岡崎文夫教授の推薦で京都大学人文科学研究所へ短期留学、平岡武夫先生の知遇を得た。東北大学文学部助教授（1950）に就任、中国古代先秦諸子百家文献の本文批判により定本を定め、確かな訓詁と、簡明な翻訳に成る訳注書（『孟子』『荀子』『論語』『孫子』『呉子』『莊子』『老子』『韓非子』『大学・中庸』）及び、中国哲学・思想史については門外漢の人士に対する啓蒙書（『老荘の世界－淮南子の思想』『孟子』『諸子百家』『論語の世界』『易の話』『孔子』『死と運命』『老荘を読む』『中国思想を考える－未来を開く伝統』『論語と私』）などの発刊に取組むと共に、戦国秦漢期における思想史の空白を埋める文献学的研究を展開、論文『秦漢思想史研究』を京都大学（主査は重澤俊郎教授）に提出（1961）、旧制文学博士の学位を受け、東北大学文学部教授（1962）に昇任。附属図書館長・評議員併任中に、アメリカの主要図書館を視察し、新知見を得て、レポート「東北大学附属図書館白書」を本川弘一総長に提出、「東北大学附属図書館の現状と新営本館の構想」を立案、折から大学紛争に遭遇したが、ついに川内新キャンパスへの移転と、懸案『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』の編纂を実現。文学部長・文学研究科長・附属日本文化研究施設長併任前後には、中国新出土の考古文物発掘に伴い、『孫臏兵法』『唐抄本鄭氏注論語集成』を刊行し、吉川幸次郎・貝

塚茂樹・神田喜一郎・小川環樹諸先生と、『武内義雄全集』全10巻を編刊（1978-1979）。停年により東北大学教授を退官（1983）後は、追手門学院大学に転じ、文学部東洋文化学科教授・文学部長在任中に、大著『管子の研究』（岩波書店1987年初版）を公刊。辞職後は、元東北大学教授晩年の門弟子らと、既刊本以外の論文集『金谷治中国思想論集』上中下3巻を選び（1997）、武内義雄博士（文化功労者・日本学士院会員）の考証学を継承発展させ、「特に中国古代の思想史研究分野で先導的役割を果たし、『管子の研究』は考証学の歴史に新しいページを加えた」（平成14年12月13日読売新聞朝刊）ことにより、日本学士院会員に選出（2002）された。その後も、精力的に中国との比較における「日本考証学の成立－太田錦城を中心として」や、中国新出土資料の竹簡を解読してまとめた論文「楚簡『性自命出』篇の考察」などを発表。また、東北大学在任中は、日本学術会議会員や、中華人民共和国と台湾の国際学術会議講師・日本国公立大学の非常勤講師・東北中国学会々長・日本中国学会理事長などを歴任、国内外の学界に貢献した。晩年は、地元の朝日カルチャーセンターと伊賀の里で有志による『論語』の講読を楽しみとし、日頃は書画民芸を嗜み、研究は生涯現役で、人生観は中庸（中和）を志していた。

「金谷文庫」は、東北大学文学部名誉教授、日本学士院会員を勤めた金谷治（かなや・おさむ 1920～2006）博士の旧蔵書である。

金谷治先生の蔵書は、先生のご長男金谷茂則氏（大阪大学工学研究科教授・理学博士）から東北大学附属図書館に寄贈（2006）され、平成20（2008）年2月28日に開催された図書館収書委員会において審議の結果、「金谷文庫」として受入れを承認された。「金谷文庫」受入れ資料の内訳は、和漢古書2,636冊、中国思想分野

の単行（中国・和・洋）書2,616冊、計5,252冊である。なお、金谷先生の旧蔵書で、東北大学附属図書館既蔵の図書と重複する金谷治先生の著書を含む中国思想分野や、それ以外の資料（文学・美術全集、学術雑誌論文の抜刷、日誌・筆記類など）の大半は、現在三重県伊賀市川西596気付「（仮称）金谷治記念館」（未公開）に別置保管されている。

斯くして、武内義雄博士の考証学は、直系の後継者金谷治博士により名実ともに東北大学に根を下ろすこととなった。

私は東北大学文系OBの一人として、来る東北大学創立120周年記念事業（2027年）において「（仮称）東北大学附属善本図書館」を創設することを提唱しているが、「金谷文庫」開設により善本図書館構想に一層の弾みがつくのではないかと期待している。

参考：金谷治「私の研究生生活」（『中国学志』謙号2000年12月）、『東北大学百年史』4部局史1第3～5編（2003年5月東北大学発行）、「談（かたる）中国哲学金谷治さん（83）」（『河北新報』2004年2月6回連載）、中嶋隆藏「金谷治先生のご逝去を悼む」・源了圓「金谷さんの日本研究」（『東方學』第112輯2006年7月）、会員源了圓「故金谷治会員追悼の辞」（『日本学士院紀要』第61巻3号2006年9月）、町田三郎「金谷治先生を偲んで」（『東方宗教』第108号2006年11月）、中嶋隆藏「永別金谷治先生」（『伊賀百筆』Vol. 16 2006年12月）、三浦秀一「金谷文庫の公開に寄せて」（『河北新報』2008年12月25日）

平成20（2008）年10月吉日

文責：門下生 内藤幹治

（ないとう・もとはる）

古文書見学会の開催

文学研究科准教授 柳 原 敏 昭

11月29日（土）、日本古文書学会の主催による古文書見学会が、附属図書館本館二号館会議室で開かれました。日本古文書学会は、古文書を中心とする歴史資料の研究のために組織された全国学会です（会長：湯山賢一奈良国立博物館館長）。毎年、二ヶ所ほどを選定して古文書見学会を開いています。

今回は、附属図書館所蔵の倉持文書と秋田家史料を展示しました。

倉持文書は、室町幕府を建てた足利家の家来、倉持氏に伝わった文書で、1953年に図書館が寄贈を受けたものです。尊氏やその弟・直義はもちろんのこと、父・貞氏、祖父・家時が発給した文書、鎌倉時代の足利氏の領地を書き上げた文書などがあります。世の中に室町時代以降の足利氏発給文書はたくさんありますが、鎌倉時代のものはごく僅かしかありません。それがまともって遺っているのですから、大変貴重なものです。



秋田家文書は、中世に東北地方北部から北海道にかけて勢力を誇った安藤氏の末裔、秋田氏が伝えた文書です。1939年に寄託され、戦後、東北大学の所蔵となりました。万を越える膨大な文書がありますが、今回は近世初期の天下人とその周辺、つまり豊臣秀吉・秀次・秀頼、徳川家康が秋田家宛に差し出した文書、および秋田家当主が収集した中世文書を展示しました。

全国から集まった研究者は約20名、関東を中心に遠くは神戸からの参加者もありました。皆さん、無類の古文書好きとあって、実に熱心に見学されていました。古文書の研究も、最近は文字を読み、様式を問題にするだけでなく、料紙を顕微鏡で観察し、その組成を調べるというようなことが行われています。今回も顕微鏡をパソコンにつないで、料紙の繊維を映すということを試みました。



そんなこんなで予定していた2時間半はあっという間に過ぎてしまいました。見学者の皆さんには、堪能していただけたと思いますし、一方、我々も附属図書館所蔵文書の価値を再認識することができました。

末筆ながら、ご協力いただいた附属図書館ならびに関係者の方々に御礼申し上げます。

（やなぎはら・としあき）

会 議

◎学 内

20.10.21 平成20年度第5回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 平成20年度時間外開館経費について
- 2) 第二期中期目標・中期計画について
- 3) 理系新分館の運用について
- 4) 学生閲覧室開架図書の貸出冊数について
- 5) 平成21年度 Scopus の経費負担について
- 6) その他

・報告事項

- 1) 平成20年度第2回学術情報整備検討委員会検討結果について
- 2) 平成20年度第3回国立大学図書館協会理事会等について
- 3) 平成20年度部局評価について
- 4) 附属図書館本館耐震改修工事について
- 5) 東北大学機関リポジトリへの学位論文登録について
- 6) 百周年記念刊行物について
- 7) 遡及入力について
- 8) 平成20年度東北大学附属図書館 宮城県図書館合同企画展「はっぴい さんぼう」について
- 9) 全学授業「大学生のための情報検索術」について
- 10) その他

20.12.17 平成20年度第6回附属図書館運営会議

・協議事項

- 1) 第二期中期目標・中期計画について
- 2) 平成20年度計画の実施状況及び平成21年度計画（案）の確認について
- 3) 3館構想及び事務一元化について
- 4) その他

・報告事項

- 1) 部局評価ヒアリングについて
- 2) シンポジウム学術情報流通の改革を目指して

3) 国立大学図書館協会臨時理事会について

4) 附属図書館耐震改修工事について

5) 百周年記念刊行物について

6) 平成20年度東北大学附属図書館 宮城県図書館合同企画展「はっぴい さんぼう」について

7) Scopus について

8) 寄付金の受入れについて

9) その他

20.10.23 平成20年度第3回附属図書館商議会

・協議事項

- 1) 平成20年度時間外開館経費について
- 2) 第二期中期目標・中期計画について
- 3) 理系新分館の運用について
- 4) 学生閲覧室開架図書の貸出冊数について
- 5) 平成21年度 Scopus の経費負担について
- 6) その他

・報告事項

- 1) 平成20年度第2回学術情報整備検討委員会検討結果について
- 2) 平成20年度第3回国立大学図書館協会理事会等について
- 3) 第63回東北地区大学図書館協議会総会について
- 4) 平成20年度部局評価について
- 5) 本館耐震改修工事について
- 6) 東北大学機関リポジトリへの学位論文登録について
- 7) 百周年記念刊行物について
- 8) サイエンスダイレクト・バックファイルの利用について
- 9) 平成20年度東北大学附属図書館 宮城県図書館合同企画展「はっぴい さんぼう」について
- 10) 全学授業「大学生のための情報検索術」について
- 11) その他

人 事 異 動

平成20年12月31日現在

発令年月日	新 職	氏 名	旧 職	備 考
20.12.31		星 政 則	工学分館管理係長	辞 職

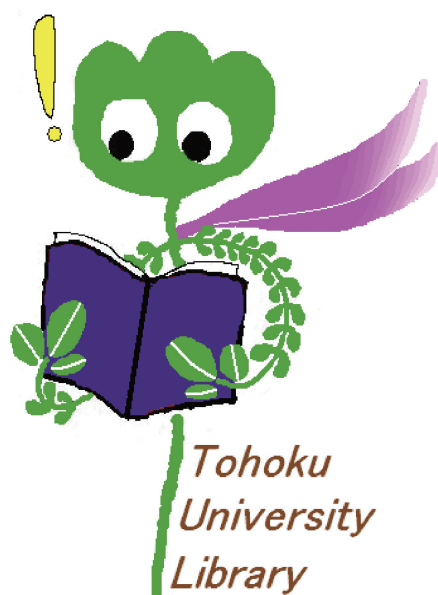
編 集 後 記

秋の企画展が終了しました。今回を見逃した方は、せめて木這子の掲載記事を読んで雰囲気味わって下さい。次回には足を運んで頂くとなお嬉しいですよ。

附属図書館イメージキャラクターをご存知ですか。耐震工事中の本館正面玄関へ至る小径の道路側に設置された、案内板でご覧になれます。公募で9月に決定したばかりです。段々と登場する機会も増えるでしょう。地味ですが生命力が強い「萩」のように、末永く親しまれて欲しいものです。

インフルエンザの予防接種をしても風邪はひくものです。他の症状はもう無いのに、長引く咳が困り者です。すぐ受診しましょう。風邪が治った後に喉が過敏になる人や、気管支炎になっている場合もあります。

もっとも、別の病気に罹っていると判明する事があるのも確かです。2008年の「今年の漢字」は「変」でした。少し変だと思ったら「大変」になる前に、早めの原因究明と治療をお勧めします。



東北大学附属図書館報「木這子」 第33巻第3号（通巻124号）発行日 平成20年12月31日

発行人 北村 明久 広報委員会委員長 加藤 信哉

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022-795-5911, FAX 022-795-5909

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>



古紙配合率100%再生紙を使用しています